

◆ 新収蔵資料紹介(令和7年度1月)展示解説シート ◆

にしはらりゅう う 西原柳雨関連資料 ～寄稿文に見る古川柳研究家の仕事～
こせんりゅう

会期:①令和8年1月6日(火)～1月18日(日) ②令和8年1月19日(月)～2月1日(日)

久留米市立六ツ門図書館展示コーナー

本資料群は、^{しやうじま} 莊島町出身で、日本三大古川柳研究家の一人である^{にしはらりゅう う} 西原柳雨(1865～1930)に関するもので、令和7年2月25日付けで寄贈を受けました。内容は、柳雨の旧蔵資料や昭和戦後期に増訂新版された柳雨の著作など計8冊です。今回は、その中から柳雨の寄稿文が掲載された新聞記事の切り抜き2冊を紹介しします。

これらの冊子は、柳雨自ら作成したもので、貼り付けた記事に修正がされたり、執筆時期やその時の自身の年齢が加筆されたりしています。記事が世に出た後も、柳雨が自身の文章や執筆歴を記録し、また研究内容の精度を高めようとしていたことが分かります。

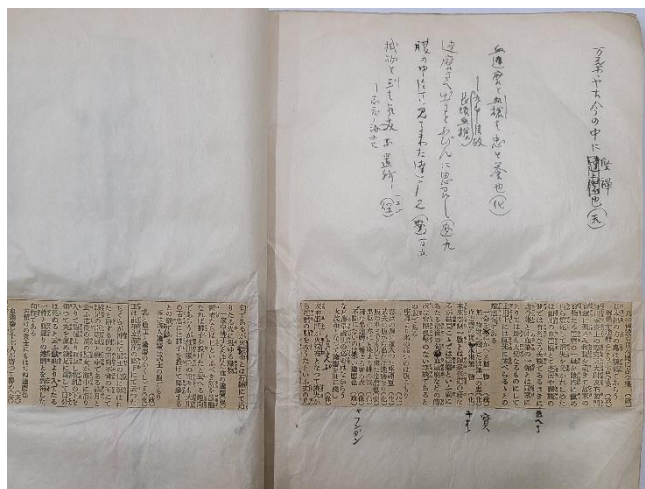


「大正十三年度 新聞切り抜き 第三」及び「筑後新聞所載 川柳九州志」の表紙

●No.1 ^{ちくごしんぶんしよさい} 筑後新聞所載 ^{せんりゅうきゅうしゅうし} 川柳九州志

大正時代～昭和戦前期 西原柳雨編

柳雨が「筑後新聞」に大正10年(1921)6月から同年12月まで連載した「川柳九州志」(全34回)の記事の切り抜き。福岡、熊本など、北部九州を中心とする地理歴史に関して詠み残されてきた川柳を柳雨が調査^{しゅうしゅう} 蒐集し、いくつかの分野に分類して解説したものです。

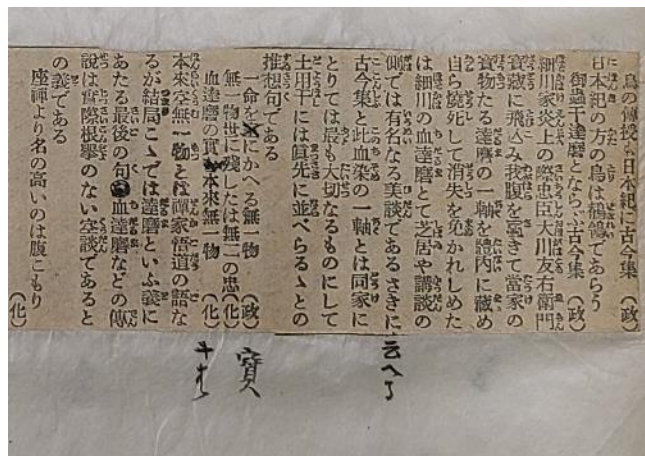


① 「川柳九州志」連載第26回 大正10年(1921)

「細川の血達磨^{ちだるま}※」という逸話に関する川柳とその解説が書かれています。句の末尾の括弧内は、その句が作られた時代を略記しています(政＝文政など)。ペン書で、誤字脱字の訂正や、記事に収まらなかった川柳句が加筆されています。

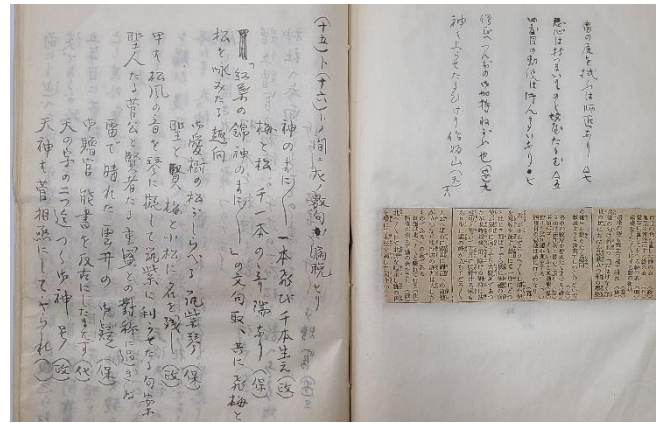
※細川の血達磨

熊本藩細川家の家臣が、元禄11年(1698)の江戸屋敷火災の際、自身の腹を切り、同家宝物の達磨の掛け軸を腹に納めて焼失から守ったという逸話。



② 「川柳九州志」連載第15回 大正10年(1921)

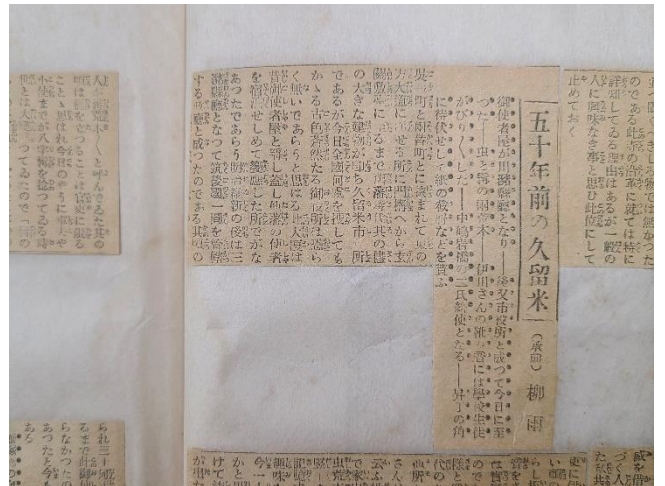
展示箇所右ページの記事では、菅原道真の逸話の一つとして、雷神となった道真が引き起こしたとされる雷にまつわる川柳が紹介されています。左ページには、15回目と16回目の記事の間に掲載するはずだった数句を、「漏脱セリ」として列記しています。



●No.2 大正十三年度 新聞投稿切抜 第三

大正時代～昭和戦前期 西原柳雨編

柳雨が大正13年(1924)度に「筑後新聞」や「^{みやこ}都新聞」に投稿した記事の切り抜き。内容には、地元久留米を題材としたもの、自身の研究と関連する地域に訪問したときのことを綴ったものなどがあります。柳雨は主に、文化芸術や風俗を題材とした川柳を研究しました。



① 「五十年前の久留米」連載第15回(全16回)

大正13年(1924) 筑後新聞

柳雨が「筑後新聞」に大正13年(1924)6月から連載を開始した記事です。当時、柳雨は60歳(数え年)で、自身の幼少期を回想しながら連載記事を書きました。展示箇所には明治時代の久留米市役所が登場します。市役所の庁舎は、もとは久留米藩御使者屋(迎賓館)で、明治時代になると三潞県庁舎に利用され、明治22年(1889)に市役所となりました。

※参考資料:明治時代の久留米市役所

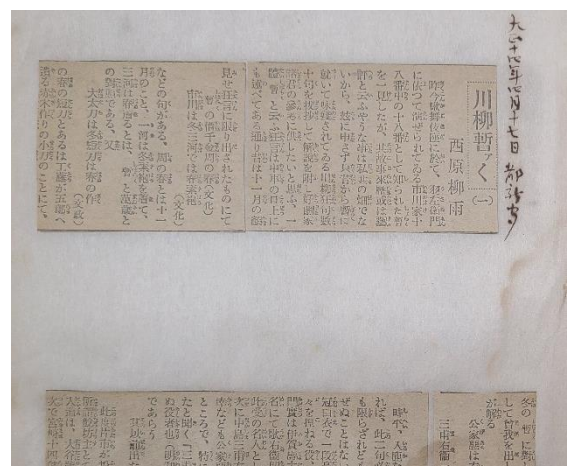
絵葉書「久留米市役所」(久留米市教育委員会蔵)



② 「川柳暫アク」連載第1回(全5回)

大正14年(1925)4月17日 都新聞

「都新聞」は、東京で明治から昭和初期にかけて発行された朝刊紙です。記事の内容は、主人公が悪党を成敗する歌舞伎の演目「^{しばらく}暫」に関する川柳の紹介と解説です。柳雨は記事中の川柳について、「暫」に登場する人物や小道具(小刀)と関連させながら解説しています。



西原柳雨 略歴

和暦(年)	西暦	年齢 (数え年)	内容
慶応元	1865	1	久留米市莊島町に生まれる。本名は一之助。
明治16	1883	19	県立福岡農学校卒業。 田主丸中学(県立久留米中学分校)の三等助教諭となる。
明治18	1885	21	中学師範学校動物・植物科の教員免許取得。 以降大正12年まで宮城、佐賀、岡山、愛知などの中学校教員を歴任する。
明治27	1894	30	中学明善校の教諭となる。
明治末頃	1911～ 12	40代 半ば	柳雨と号して古川柳の研究を始める。
大正2	1913	49	博文館より『川柳難句類解』、『川柳膝栗毛』を出版する。
大正12	1923	59	南筑中学校退職。上京し、川柳研究に専念する。
大正14	1925	61	福岡日日新聞(西日本新聞の前身)にて、柳壇の選者となる。 春陽堂より『川柳江戸歌舞伎』を出版する。
大正15	1926	62	春陽堂より『川柳江戸名物』、図書刊行会より『川柳参尾志』を出版する。
昭和2	1927	63	春陽堂より『川柳吉原志』を出版する。
昭和3	1928	64	春陽堂より『川柳年中行事』を出版する。
昭和4	1929	65	春陽堂より『川柳風俗志』、中西書房より『川柳からみた上野と浅草』を出版する。
昭和5	1930	66	4月27日病没。墓は京町の ^{でんみょうじ} 露妙寺。
昭和5	1930		岩波書店より『俳風柳多留講義 初篇』が出版される。